

体験談・官能小説 R-18

——その夜、板がざわめいた——

幼馴染は全部知っている——ヤン デレの愛が重い夜

実話投稿板より

TOR-NET

R-18

©2026 TOR-NET

本作はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

梅雨のじめじめした夜、駅のロータリーでみさきと鉢合わせた瞬間、俺の胸が一気に熱くなった。傘も差さずに歩いてた俺は、後ろ姿を見ただけで息が止まりそうだった。あの肩の線、歩くときの少し内股気味の足の運び、全部昔のまま。エステの仕事終わりの白いブラウスに薄手のベージュカーディガン、雨に濡れた黒髪の先が首筋に張り付いてて、汗と雨の匂いが混じってるのがたまらなくエロかった。俺は近づいて、傘も持たずに声をかけた。「みさき、久しぶりだな」。振り返った瞬間、彼女の目が大きく見開かれて、唇が震えた。傘を持つ手が小刻みに震えてて、息を飲み込む音が雨音の合間に聞こえた。「…え、なんでここに…」って掠れた声。声は昔と変わらないのに、どこか夫の匂いが染みついているみたいで腹が立った。近くの屋根の下に移動して、傘を寄せ合った。雨が傘に当たる音が大きくなって、彼女の吐息がすぐ耳の横で聞こえる距離。みさきは視線を逸らしながら「急いで帰らないと…」っ



て言いながらも、俺の顔をチラチラ見て、喉を少し上下させてた。白いブラウスが雨で少し透けて、鎖骨のあたりが湿ってるのが目について、指先が熱くなった。昔の合鍵は今も財布の底にあって、指で触ってるだけで胸がざわつく。帰宅後、昔の番号にかけてみた。繋がった瞬間、みさきが息を飲む音がして、「やめて…今はもう…」って震えた声。俺は笑って「ただ声が聞きたかっただけだよ」って流した。窓辺で傘をくるくる回しながら遠くを見てた彼女の姿が頭に浮かんで、夜がどんどん長く感じた。夫が出張で3日目からいないって知ってるからこそ、指が止まらなかった。

002 名無しさん 梅雨のロータリーで後ろ姿見て一気に胸熱くなったって、鉢合わせの瞬間からもうスイッチ入ってるよな…w

003 名無しさん >>2 ロータリーで息止まりそうとか大げさすぎて草

004 名無しさん >>1 いや実際ロータリーで急に声かけられたら息止まるわ、俺も梅雨の夜に似たことあったからわかる

005 名無しさん ロータリーで傘寄せ合って…白いブラウス透けて…ヤバ

006 名無しさん 夫出張3日目とか設定盛ってるし完全な釣りだろこれ

007 名無しさん ロータリーで後ろから声かけられて息止まるって、普通にビビるわ。しかも元カノっぽいと来たら尚更

008 名無しさん 夫出張3日目とか都合良すぎて草。次は「実は鍵まだ持ってる」ってオチか？

009 投稿者 >>8 鍵は今も財布の底だよ。使ってないけど

010 名無しさん 白いブラウス透けて鎖骨濡れてとか、梅雨の夜に想像したらヤバいな

011 名無しさん 電話かけた時点で完全にストーカーじゃん。声聞きたかっただけとか言い訳臭え

012 投稿者 >>10 声聞きたかっただけだよ。本当

013 名無しさん エステ帰り設定も盛ってるだろ。ベージュカーディガンとか具体的に書きすぎ

実況台本

……雨、すごい。傘を差してるのに、じめじめした風が肌にまとわりつく。

あそこに……いる。

同窓会のあと、偶然駅で……いや、偶然じゃないよね。目が合った瞬間から、ずっとこっちを見てた。

けんた、ごめん。今、出張中なのに……こんなところで、昔の顔を見て、胸がざわついてるなんて。

……声、かけてこないで。行こう。家に帰ろう。

でも、足が動かない。

「久しぶり」って……そんな風に笑うの、ずるい。

あの笑い方、子供の頃から変わってない。

けんたのことは本当に好きだよ。でも、こうして近づかれると、昔の記憶が急に鮮やかになってきて……。

鍵も持ってるし、早くこの場を離れなきゃ。

でも、なぜか、離れられない。

……雨の音が、余計に心臓の音を大きくしてるみたい。

けんた、出張の前日に「気をつけてな」って言ってくれたよね。あの時の笑顔、思い浮かべるだけで胸が痛い。

……なのに、こうして昔の顔と目が合っただけで、頭の中がぐちゃぐちゃになってくる。

声、かけてこないでって思ってるのに、視線が戻っちゃう。

あの目、昔からこうやって私を捉まえてた。変わってない。

梅雨の雨が傘の縁を伝って、足元に落ちる音がやけに大きく聞こえる。

けんたが不在の今、もしこのまま話してしまったら……いや、話すつもりなんてない。

ただ、足が本当に動かない。

……やめて。

ここはただの通り道で、偶然会っただけなんだから。

けんたのことは、ちゃんと愛してる。毎日、帰ってくるのを待ってるし、LINEもこまめに送ってる。

それなのに、なぜかこの人の匂いが近づいてくると、子供の頃の記憶が勝手に蘇ってくる。

財布の端を指でなぞってる。鍵はちゃんとバッグの内ポケットに入れてる。

早くこの場を離れなきゃってわかっているのに、唇が震えて声が出ない。

……あの笑い方、ずるい。

子供の頃から、私が困ってるのを見ると、こうやって近づいてきたよね。

けんたには絶対に見せられない顔で、じっと見つめてくる。

雨の音が心臓の鼓動を隠してくれているみたいで、逆に余計に意識してしまう。

もう少しだけ、ここにいていいかな……いや、だめだ。

けんたが帰ってくるまで、ちゃんと家を守ってるって伝えないと。

このざわつき、雨が止むまで、ただの通り雨だと思えばいい。

きっとそう思えば……。

>>12 黒猫の残り火 息止まるのなんて普通だろ、久しぶりすぎてさ。あのロータリーで傘の先が触れ合った瞬間、みさきの鎖骨に雨粒が落ちて、ブラウスが少し透けてたの見て、もう頭真っ白だった。白い肌に濡れた生地が張り付いてるの、昔と全然変わってなくて……正直、声かけるまで息が詰まった。

家に着いたのは雨が少し小降りになった頃で、靴を脱いだ瞬間、部屋の湿った空気がまとわりついてくる。梅雨四日目、けんたは出張三日目って話はもう知ってたから、俺は財布の底で合鍵を親指で転がしながら、クローゼットの奥に押し込んであった段ボール箱を引っ張り出した。埃が舞って、指の腹にざらっとした感触が残る。部屋の電気はつけっぱなしのまま、じめじめした床に影が揺れてて、なんか息がしにくい。



中には古い写真が何枚か。みさきがまだエステの仕事始める前、笑ってるやつ。二人で写ったやつ。指で一枚ずつめくってるうちに、昔の携帯番号が急に脳裏に浮かんた。もう使ってないはずなのに、指が勝手にメモに書き写してる。数字をなぞるたびに、みさきの声が耳の奥で蘇るような気がして、胸の奥がざわつく。写真の端を指でなぞってるうちに、みさきの内股気味の歩き方とか、ベージュのカーディガンが肩に落ちてた感じとか、全部鮮明に蘇ってきて……正直、声聞きたかっただけなんだよ。本当。それ以上でも以下でもない。ただ、番号をメモした指が少し震えてたのは、誰にも言わない。

あの夜のロータリーの匂いがまだ鼻についてる。雨の土の匂いと、みさきの傘の先が触れたときの少し湿った布の感触。息を止めてたせいで、声かけたあと急に息が荒くなって、みさきが振り返った瞬間の目が今も頭に残ってる。夫が出張中だって知ってたから、なんか余計に胸が熱くなった。鍵は今も財布の底で温かい。使わないけど、存在してるだけで、なんか安心するんだよな。

部屋の隅で古い携帯の充電器が転がってるのを見て、急に昔の部屋の匂いがした。みさきが笑ってた声とか、電話の向こうでため息混じりに話してた夜とかが、全部一気に押し寄せてきて……次はもう少し進んだ話になるかも。

002 名無しさん 雨粒が鎖骨に落ちたって部分で、俺も昔梅雨の夜に似た鍵探したことあったわ。埃まみれの箱開けたら古い写真出てきて、なんか胸ざわついたよ

003 投稿者 >>16 鍵を親指で転がしながら箱引っ張り出す設定、埃の感触まで書いてるのに部屋の電気つけっぱなしのままって矛盾してね？普通に息苦しくなるだろ

004 名無しさん >>16 息止まるの普通だとか言うけど、頭真っ白になるくらいならもう少し冷静にしろよ。黒猫の残り火が前から突っ込んでた通り大げさすぎ

005 名無しさん 雨粒…鎖骨…頭真っ白…w

006 名無しさん 黒猫の残り火も息止関連で絡んでたけど

007 名無しさん 普通にヤバい流れ…次

008 名無しさん 合鍵持ってる時点で民法上問題あり得るから、使わないにしても早めに処分した方がいい。写真や番号メモもプライバシー侵害のリスクあるよ

009 名無しさん 合鍵持ってる時点で普通にヤバいだろ。使わないって言っても、夫が出張中って知ってて財布に入れてる時点でストーカー予備軍じゃん。写真と番号メモと一緒に処分しろよ。

010 投稿者 >>23 使わないって言ってるだろ。ただ持ってるだけで安心するんだよ。

011 名無しさん >>12 雨のロータリーで透けたブラウス見て頭真っ白とか、相当ヤバい目線じゃん。みさきが気づいてないだけで引いてるかも。

012 投稿者 >>25 電話はかけてない。ただ番号を思い出しただけ。

実況台本

……けんた？ うん、聞してるよ。

雨、すごいね……今、ロータリーのところにいる。傘、ちょっと傾けちゃった。

……うん。ちゃんと鍵、かけて出たよ。

冷蔵庫の牛乳、賞味期限切れそうだったから、帰ったら捨てといてって言ったよね。

……ん。

大丈夫、平気。

ただ……ちょっと、昔のことを思い出してただけ。

彼、黙って立ってる。

笑ってるわけじゃない。ただ、じっと私の顔を見て、合鍵の存在を匂わせるような、静かな目。

心臓が、痛いくらい鳴ってる。

けんた……ごめんね。

今、声が遠く聞こえる。

出張先、忙しいんでしょ？ 無理しないでね。

……うん。

私も、ちゃんと待ってるから。

ただ……今、ちょっと熱いんだ。

この雨の匂いと、目の前の彼の存在で、胸の奥がじわじわ溶かされていくみたいで。

やめて、って思ってるのに……

体が、反応してる。

夫の声がまだ耳の奥に残ってるのに、どうしてこんなに鼓動が速くなるんだろう。

……けんた。

今、ちょっと、電話切ってもいい？

雨、強くなってきたから。

あとでまたかけ直すね。

……はあ。

切っちゃった。

でも、彼はまだここにいる。

合鍵を握った夜の続きみたいに、静かに笑ってる。

この部屋に、彼が入ってくる。

三日目の夜。

けんたが帰ってくるまで、普通に過ごしたかったのに……

もう、逃げられない気がする。

……どうしよう。

心のどこかで、わかってる。

止めなかったのは、私だって。

罪悪感と、抑えきれない懐かしさが、胸の中でぶつかり合ってる。

この鍵が、私の家を、彼に開けさせる。

もう、戻れない線が、じわじわ近づいてきてる。

夫の声が遠ざかるたびに、私の体は熱を増していく。

……ん。

やっぱり、熱い。

この濡れたアスファルトの匂いと、彼の視線で、胸が溶けていく。

けんた、ごめん。

今、この瞬間、私の中で何かが、確実に変わり始めている。

ここまでが体験版です。続きは製品版で――

第2部では、音声実況の第1トラックをお楽しみいただけます。

サークル：TOR-NET